

国公立大学 | 説明問題演習①

【解答】

(1) 人は当時気づいた事柄に、後から得た情報や類似した経験に基づく予想、他人からの情報を加えて記憶を作ること。[55 字]

(2) 同じ形の記憶を繰り返し思い出すことでなじみが生じ、それが確かな記憶だという感覚につながるから。[47 字]

(3) 関係やパターン、意味を残す一方で、多くの細部を失ってしまう性質。[32 字]

(4) 情報の大部分は後の必要とは無関係で、すべてを同じ精度で保存すると重要な情報を見極めにくくなるから。[49 字]

(5) 正解:(イ)

【解答・解説 | 自己採点基準】

(1) 12 点

本文の対応箇所 | 第 2 段落

When people remember an event, they combine the details they noticed at the time with information acquired later, expectations based on similar experiences, and sometimes suggestions made by others.

採点基準

①当時気づいた事柄・細部[2 点] ②後から得た情報[2 点] ③類似した経験に基づく予想[2 点] ④他人からの情報・示唆[2 点] ⑤これらを組み合わせ

て記憶を作る[4 点] 計 12 点

自己採点ポイント | ①～④を並べるだけでなく、それらを「組み合わせて記憶を作る」という中心内容まで書けているかを確認する。

(2) 10 点

本文の対応箇所 | 第 3 段落

Familiarity with a particular version of the past can create a feeling of certainty even when that version is inaccurate.

採点基準

①記憶を繰り返し思い出す・再構成する[3 点] ②その記憶になじみが生じる[3 点] ③なじみが「確かだ」という感覚を生む[4 点] 計 10 点

自己採点ポイント | 「繰り返す → なじみ → 確信」という因果関係が書けているかを確認する。

(3) 8 点

本文の対応箇所 | 第 4 段落

Human memory instead preserves relationships, patterns, and meanings while allowing many details to disappear.

採点基準

①関係・パターン・意味を残す[4 点] ②多くの細部を失う[4 点] 計 8 点

自己採点ポイント | 「記憶が不正確」という抽象的な説明ではなく、「何を残し、何を失うのか」まで具体化する。

(4) 12 点

本文の対応箇所 | 第 4 段落

Most of the information we encounter is irrelevant to our later needs, and storing all of it with equal precision would make it difficult to identify what matters.

採点基準

①情報の大部分は後の必要とは無関係 [4 点] ②すべての情報を同じ精度で保存する [3 点] ③重要な情報を見極めにくくなる [5 点] 計 12 点

自己採点ポイント | 「不要な情報が多い → すべて保存する → 重要な情報を見極めにくい」という論理関係を答案に反映する。

---

(5) 8 点

正解: (イ)

(ア) × 第 2 段落には *People are usually unaware of this process.* とあり、本文と逆です。

(イ) ○ 第 3 段落の *Familiarity ... can create a feeling of certainty even when that version is inaccurate.* と一致します。

(ウ) × 第 4 段落では、すべてを同じ精度で保存すると *difficult to identify what matters* になると述べています。

(エ) × 最終段落では、記憶には現在を理解し未来に備える機能があると述べており、「利用すべきでない」とはしていません。

---

【全訳】

記憶は記録ではない

ほとんどの人は、記憶を、必要になるまで過去の経験が変化せずに保管されている貯蔵庫のようなものだと考えている。しかし心理学の研究は、それとは異なることを示している。①私たちが記憶しているものは、もともと経験したことの単なる複製ではなく、思い出す際に心が作り上げる過去の一つの形なのである。

このような再構成が起こるのは、心かもとの経験だけに頼っているわけではないからである。①人がある出来事を思い出すとき、そのとき気づいた細部に、その後得た情報、類似した経験に基づく予想、そして時には他人から与えられた情報を組み合わせている。その結果、記憶にはもとの経験にはなかった要素が含まれることがある一方、実際にあった細部が消えることもある。人は通常、この過程に気づいていない。

記憶はまた、思い出されるたびに変化することがある。ある経験について話し合ったり、自分なりの説明を繰り返し語ったりすることで、記憶されている内容が徐々に作り変えられることがある。②実際、記憶に対する確信は、まさにその記憶が繰り返し再構成されてきたために強まることさえある。③過去についての特定の記憶になじみが生じることで、その記憶が不正確でも、確かだという感覚が生まれることがある。

このような不安定さは欠陥に見えるかもしれない。しかし、あらゆる細部を保存しても、必ずしも記憶がより有用になるわけではない。④私たちが接する情報の大部分は後の必要とは無関係であ

り、それらすべてを同じ精度で保存すると、何が重要なのかを見極めることが難しくなる。③人間の記憶はその代わりに、多くの細部を失いながら、関係性やパターン、意味を残す。したがって、③この一見したところの弱点が、記憶の有用性に寄与しているのかもしれない。

記憶が証拠として使われる場合には、正確さは依然として重要である。しかし記憶は、過去の経験を利用して現在を理解し、未来に備えることにも役立つ。証拠となる記録は変化に耐えなければならないが、将来の行動を導く記憶は、状況の変化に応じて組み直されることで有用になる場合がある。したがって、記憶が過去を完全に保存しないからといって、必ずしも記憶という仕組みに欠陥があることにはならない。